

運動有能感を高める小学校体育授業の実践Ⅳ

—異学年交流によるスポーツ鬼ごっこの実践を通して—

(高知県スポーツ鬼ごっこ連盟・鬼ごっこ総合研究所客員研究員) 山崎功一

Practice of elementary school physical education lesson to enhance exercise competence⁴ -Through tracking grade game (sports onigokko) by the different grade interchange-

Kochi Sports Onigokko Faderation・Onigokko research institute guest researcher Yamasaki, Koichi

キーワード：運動有能感 スポーツ鬼ごっこ 小学校体育 異学年交流

I. 研究目的

学習指導要領改訂では、心と体を一体として捉え、生涯にわたる心身の健康の保持増進や豊かなスポーツライフの実現を重視し、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方ができるように配慮されている。

しかしながら、以前より積極的に運動する児童とそうでない児童の二極化への指摘や体力低下傾向が問題となっている。新学習指導要領の内容の取扱いにおいても、「特に、運動を苦手と感じている児童や、運動に意欲的に取り組まない児童への指導を工夫するとともに」と運動を苦手と感じている児童や意欲的に取り組まない児童への指導について追加されている。さらに、「ゲームについては、味方チームと相手チームが入り交じって得点を取り合うゲーム及び陣地を取り扱うゲームを取り扱うものとする」と積極的に運動する子どもとそうでない子どもの二極化への指摘を踏まえ、運動の魅力に触れることができるよう、相手との攻防を楽しむ等の指導内容が示されている。

運動に対する愛好的な態度を育むには、児童自らが運動を行いたい、チャレンジしたいという思いを高めること、つまり内発的動機づけを高める必要がある。内発的動機づけを高める視点として、岡澤ら(1996)は「運動有能感」を高めることを提唱している。運動有

能感とは、「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の3因子から構成されている。岡澤らは運動有能感の構造を明らかにし、小学校から大学生まで使用可能な「運動の有能感測定尺度」を作成している。さらに、運動に対する内発的動機づけと運動有能感には正の相関関係があるとしている。

そこで本研究は、児童の運動有能感の変容をみるために「運動の有能感測定尺度」を授業で具体的に活用し、その要因を分析することによって、具体的な成果になるのではないかと考えた。そして、運動を積極的にする児童とそうでない児童の傾向を明らかにするために、ゴール型の鬼ごっこを教材化し、単元実践を試みる。さらに、異学年合同(3年生と4年生)で2実践を異なる教師で行い比較分析することで、本教材の有効性を確認することを目的とする。

II. 研究方法

1. 授業研究

(1) 対象

- ① 2021年度高知市立U小学校3,4年生2学級
- ② 2021年度高知市立U小学校3,4年生2学級

(2) 教材 ゲーム領域(ゴール型・スポーツ鬼ごっこ)

- ①,②とも1単元5時間を対象とした。

時間	内容
1時間	オリエンテーション/試しゲーム
2時間	鬼ごっこを楽しむ/リーグ戦Ⅰ
3時間	作戦を立てて楽しむ/リーグ戦Ⅱ
4時間	作戦を工夫して楽しむ/リーグ戦Ⅲ
5時間	まとめ/トーナメント

(3) 期 日 2021年11月～12月。

(4) 教 師

①男性教師,女性教師,計2名②女性教師2名が授業を担当した。

(5) 調査項目 運動の有能感に関する調査

運動有能感の変容をみるため,単元前後にアンケート調査(12項目)を実施し運動有能感の変容を整理した。

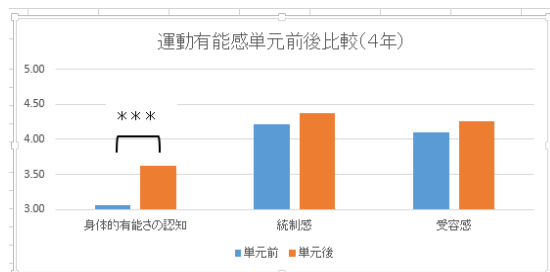
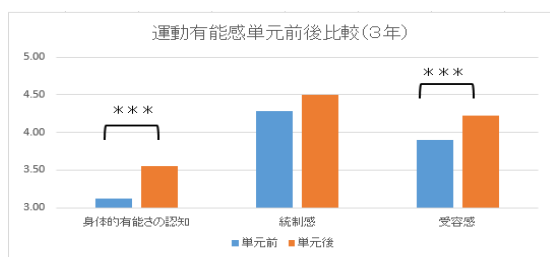
(6) 分析方法

統計処理はSPSS統計パッケージで統計処理した。

III. 研究の結果と考察

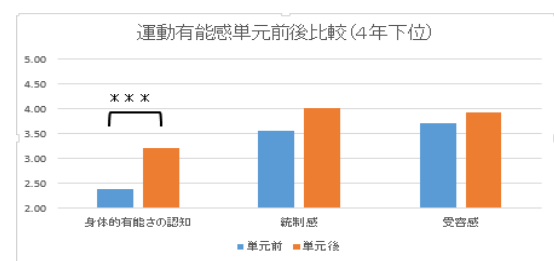
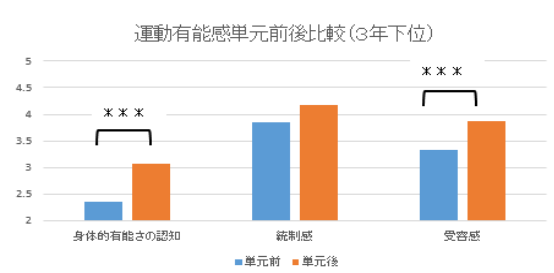
(1) 運動有能感に関する調査 (全体)

単元前後の平均値について, t 検定により比較を行った。その結果, 児童は運動有能感の高まりがみられた。全体においては3年生では『身体的有能さの認知』(p<0.001)『受容感』(p<0.001)の平均点の差が特に顕著であった。4年生では『身体的有能さの認知』(p<0.001)の平均点の差が特に顕著であった。以上のことから, スポーツ鬼ごっこは, 誰でも楽しめ, 経験値を増すことで, 運動に対する自信につながる事ができたと考えることができる。



(2) 運動有能感 (下位群)

単元前後の平均値について, 下位群においても比較を行った。全体と同様に3年生では『身体的有能さの認知』(p<0.001)『受容感』(p<0.001)の平均点の差が特に顕著であった。4年生では『身体的有能さの認知』(p<0.001)の平均点の差が特に顕著であった。これらのことから, 特に下位群においては得点を挙げるだけでなく, 得点を取らせなかったことや異学年のグループの声かけが, 運動ができるという自信につながっていったと考えられる。



IV. 結論

スポーツ鬼ごっこ教材では, 中学年において, 児童の運動有能感の高まりがみられる。このことは, 得点獲得のための作戦遂行の方法や仲間との協力などが密であり, 子どもたちにとって各自に役割があることから, 身体的有能さや受容感を得られやすい教材であること, 異学年との交流において, 作戦をもとに人間関係を深めることの可能性も示唆された。

今後は, 運動有能感が高まるための要因は何であるのかを, さらに検証していく必要がある。

引用・参考文献

- [1]文部科学省(2017), 新学習指導要領解説, 文部科学省。
- [2]岡澤祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎(1996), 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究, スポーツ教育学研究, 16(2):145-155。